

マレーシア・ボルネオ島の熱帯雨林再生をめざして

世界中の生物の50%以上は熱帯雨林に棲息・生育しているといわれています。その熱帯雨林が近年、商業伐採などにより、急速に破壊されつつあります。富士通では、生物多様性保全の観点から世界の三大熱帯雨林のひとつである、東南アジアのマレーシア・ボルネオ島で熱帯雨林の再生に取り組んでいます。

原生種フタバガキを植えて 本来の熱帯雨林の姿に

2002年よりサバ州森林開発公社、(財)国際緑化推進センターの支援を受け、サバ州キナルート地区にある「富士通グループ・マレーシア・エコ・フォレストパーク」の150haの土地に社員がボランティアで植林を実施し、熱帯雨林の在来種であるフタバガキ種を、これまでに37,500本植えてきました。

サバ州の熱帯雨林は、木材として伐採され90年代にはすっかりはげ山になっていました。そこでマレーシア政府は、成長の早いオーストラリアの木（アカシア・マンガウム）を植林し、今では、この木が青青と茂っています。しかし、この木はボルネオ島の在来種ではないため、もともとすんでいた生き物がすみにくい環境になってしまいました。そこで富士通では、ボルネオ島本来の熱帯雨林の再生を目指し、原生種のフタバガキを植林しています。実際に、ここ数年の活動により、最近、数種類の鳥やサルが森に戻ってきています。

そして、私たちの活動で、絶滅危惧種であるオランウータンやボルネオゾウのすめる熱帯雨林の姿を取り戻したいと願っています。



生物多様性の保全

富士通は、2008年5月にドイツで開催された「生物多様性条約第9回締約国会議」で、「ビジネスと生物多様性に関するイニシアティブ」のリーダーシップ宣言に賛同する企業として署名しました。今後も環境マネジメントシステムの枠組みのなかで、生物多様性保全に向けた活動を推進していきます。

●2008年度の植林ボランティアに参加した

富士通マイクロエレクトロニクス
マーケティング統括部
プロモーション推進部



池田 均さん

2008年11月27日～12月2日の期間、富士通グループ・マレーシア・エコ・フォレストパーク植林ボランティアに参加しました。

初日午前は、まずボートでパーク西側のマングローブ・クルーズへ。その川の水は、赤土ラテライトという泥が溶けていて薄黒く濁っていました。そして、午後にはさっそく植林を体験しました。この植林ボランティアは2002年から富士通グループの仲間の手により、多くのフタバガキの苗を植えてきました。そして、今回のボランティアではこれまで植えてきたエリアにおいて、苗が育たなかったところに補植を行う取り組みとして、2日半で40ライン、754本の苗木をマレーシア関係会社のボランティアと共に植えました。全ての苗木が育つわけではないことから、少しでも生存率を高めるべく、これまで以上に丁寧に植えることを心掛けました。

最終日は、メンテナンス作業としてアカシア・マンガウムという木の表面の皮を鉋で削る作業を行いました。これは、フタバガキの若木は直射日光を強く受けると枯れてしまうことから、先ずこの木の樹冠で日陰を作り、フタバガキが成長する数ヵ月後にはマンガウムを枯らして日当たりを良くするためです。

フタバガキが成木に育つには50から60年かかるといわれます。それを見届けることはできませんが、我々が植林した大部分の木が成木に育ち、熱帯雨林が再生するのを願ってやみません。

